

萩ジオパーク推協だより

2017年11月9日 No. 32

〒758-8555 山口県萩市大字江向 510
TEL : 0838-21-7765 FAX : 0838-25-7767
e-mail : hg-geo@city.hagi.lg.jp
HP : <http://www.city.hagi.lg.jp/site/hg-geo/>

発行：萩ジオパーク構想推進協議会
事務局：萩市ジオパーク推進課
Facebook: <https://www.facebook.com/HagiGeoProject>

“ あしたへ～日本のジオパーク！ 東北から発信！ ” 日本ジオパーク全国大会

2017.10.25（水）～27（金） 男鹿市民文化会館ほか

日本ジオパークネットワーク活動開始10周年を記念し、『第8回日本ジオパーク全国大会 2017 男鹿半島・大湊大会』が、10月25日（水）～27日（金）の日程で、日本のジオパークが目指す明日、持続可能な地域の明日を皆で共有し考える大会として開催されました。

○開会セレモニー

はじめに中学生たちによる男鹿半島・大湊ジオパークの紹介があり、その後、菅原広二大会実行委員長（男鹿市長）から「悠久の歴史の中、美しい大自然があり父祖が生活を営んできた地域を何とか残していきたい。この大会でジオパークが大きく変わったと言われるような大会にしたい。“龍になれ、雲、おのずから集まる”。一人ひとりが龍になり地方創成を。高い理想をもつてのぞんでいきたい。」という趣旨の主催者あいさつがありました。

また、共催者である日本ジオパークネットワークの米田徹理事長（糸魚川市長）から、この10年間の日本におけるジオパーク活動の振り返りとともに「正しく理解し進めていくことによって質の高いジオパークを目指していきたい」という思いが、日本ジオパーク委員会の中田節也副委員長（東京大学地震研究所教授）から「審査ではジオパークのガイドラインに沿っているかどうか深く確認するようになった。ジオパークの運営体制などが問われる。何のためにジオパークをやるのか。持続可能な地域社会の実現のため、関係者がともに考え続けてもらいたい」との考えが示されました。（事務局長：福島康行）

○基調講演

開会行事に続く基調講演では、林信太郎氏（秋田大学大学院教育研究科教授）により、「ジオパークを楽しく料理しよう！ーキッチン火山学ー」と題して、お話をされました。例えば、ココアカルデラ実験など、年齢に関係なく楽しく学べ、コンデンスミルクとココアを使用して、溶岩の流れる様子は、萩の火山の説明で「試してみたい！」とワクワクしました。何より、講演されている林先生ご自身が楽しそうでした。「ガイド自身が、まず楽しさや感動を感じなければ、お客さんには伝わらない。」という言葉思い出しました。

（報 告：斉藤みよ子）



【全体会場：閉会セレモニー】



【会場ホール：ポスターセッション】

新規申請地域事前相談会に参加して 10/24(火)

全国大会の前日、来年度の日本ジオパークネットワークへの新規加盟を目指す地域を対象にした事前相談会があり、当協議会も出席しました。この相談会は、翌年度に申請する地域が申請を申し出る場でもあり、萩は来年度に再度申請する申し出をするとともに、現在までの取組みについて発表をしました。萩以外には、再来年以降の申請を目指している地域も含めて7地域（飛騨山脈、土佐清水、月山、三好市、十勝岳、桜島・錦江湾、霧島）が参加していました。

前半は、ユネスコ世界ジオパークの評議員でもある渡辺真人氏によるジオパークについての説明会でした。ユネスコ世界ジオパークと日本ジオパークの現状、ユネスコ世界ジオパークの理念、審査の動向、そしてジオパークに取り組む上での覚悟、といった内容で約1時間の講演でした。

世界ジオパークが2015年にユネスコの正式事業になってから、審査などの仕組みの議論がさらに活発化し、よりわかりやすく明確な基準の下で進められるようになってきています。世界ジオパークに準じた活動をしている日本ジオパークも、同様に審査に関わる仕組みが大きく変わろうとしているという説明もありました。

来年は変革の年になりそうです。萩はその中で、他の地域を牽引していくくらいの気概をもって臨みたいものです。

後半は、各地域の取組みについての発表の時間でした。それぞれが取組み内容をまとめたポスターを会場に貼り出し、自由に議論を交わす時間です。萩ジオパーク構想のポスターでは、過去1億年にわたるマグマの胎動が生み出した萩の地質・地形の特徴と人の文化との関わり、これまでのジオパーク活動（萩ジオマスター講座、教育分野の取組み、龍が通った道や笠山周辺での住民主体の地域振興への取組みなど）についての紹介をしました。他では見られない萩特有の地質や地形に関心を持つ人もいれば、ジオパークの取組みについて、自分の地域でも参考にしたいという声も聞かれ、全国のジオパーク関係者から意見をもらったり、活発な議論や情報交換をすることができました。

認定審査への申請は、来年の4月です。今回多くの方々からいただいた情報や助言を活かして、皆さんと一緒にジオパークとしての萩をつくりあげ、審査の時には「どこのジオパークよりも面白い」と、審査員に評価してもらえようようにしたいと考えています。

（ジオパーク専門員：白井孝明）



【萩ジオパーク構想の特徴を説明する白井専門員】

参加した分科会の報告 【2日目】 10月26日(木)

2日目は、午前中に分野別の分科会が開催されました。「首長・会長」「保全」「教育」「ガイドスキル」「ガイド講習・運用」「ツーリズム」「国際連携」「ジオストーリー・専門員」「人・歴史」「理科教育支援」の10分科会が設けられましたが、萩からの参加者は分かれてそれぞれの分科会に参加しました。その中のいくつかの様子を報告いたします。

分科会② 「保全」 参加者：福島康行

「海の崖からサイトの保全を考える」では、最初に男鹿半島・大瀧ジオパークの安田（あんでん）海岸ジオサイトを訪問しました。約50万年前から8万年前までの地層を連続して見ることができる、500m以上続く海食崖の露頭を見学し、風雨による侵食、海食崖の崩落による植生変化、漂着ゴミ等の現状や研究者によるサンプル採取の問題等について説明を受けました。続いての座学では、山陰海岸・銚子・八峰白神ジオパークからの事例も含め、班ごとのワークショップを行いました。「保全については様々な立場の主張があること」「保全により他の影響がでること」等の問題提起があり、「知恵を出し合い、折り合いをつけることが重要」であり、そのためには「保全の目的を明確にして考える必要があること」が確認されました。

分科会④ 「ガイドスキル」 参加者：斉藤みよ子

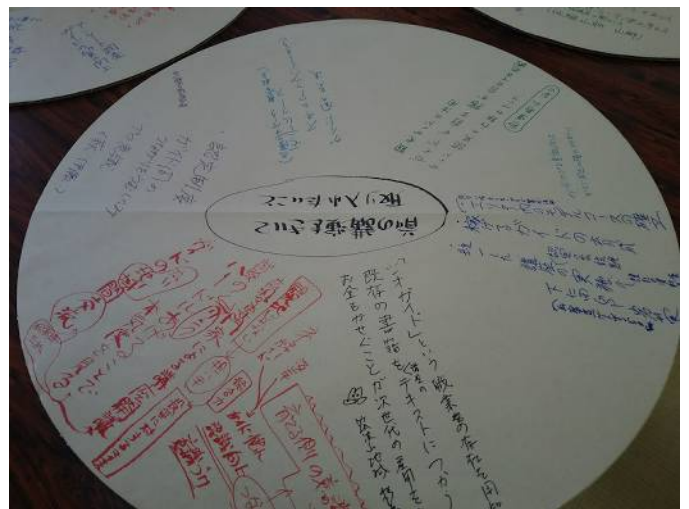
ガイド技術を考える「なぜ、プラタモリが楽しいのか!」をテーマに、ガイド実践に必要なインタープリテーションの視点について、古瀬浩史氏（帝京科学大学）、実際にタモリさんを案内したジオパーク関係者の話を聞きました。

*100 ある話題を 5 つくらいにしばる *テーマを決める *科学的な説明ができること などの視点がたくさんありました。中でも一番大切なことは、「お客さんが主役であること!」であり、*お客さんが、興味を持つように話をもっていく *間（ま）をとること *答えを引き出す *お客さんが話をする。などの視点が大事だと再確認しました。ガイドとして反省をし、これから解決すべきテーマは山ほどあります。

実習では 5 名ずつの班に分かれ、4 枚のフリップを使って「自分がここにいる理由」について、それぞれ自己紹介をしました。3 枚でも 5 枚でもない、4 枚で解説するためには、どこをどういう風に伝えるか。視覚的に分かりやすい教材の活用、ストーリーのある「テーマ」の設定、体験の重視、ほんの 5 分間に出された課題の中には、以上のようなメッセージが含まれていました。参加者 150 名の一人ひとりが何かをつかんで持ち帰り、活用しようとする熱意が感じられた有意義な分科会でした。

分科会⑤ 「ガイド講習・運用」 参加者：伊藤靖子

推進協議会やガイド団体の事務局が対象の分科会で、まず事前に行われた「ガイド運営に関するアンケート調査」から見える課題を共有しました。ガイドの高齢化、若年層のジオガイド養成と人材確保、ジオガイドの質の維持と向上はどうしたらいいのか? といった意見から、「ジオガイドの質の維持と向上について」がテーマとなりました。洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパークと伊豆半島ジオパークの事例発表があり、どちらのガイド組織も有料でガイドを行い、行政の補助金が入らない独立した運営を行っているとのこと。事例発表を受けて、取り入れたいことは? という課題で、ワールドカフェ方式でのワークショップで分かち合いを行いました。「ガイドの有償化」、「質の確保・担保」、「プロガイド養成」がキーワードとして上がってきました。こうした点をもとに、萩での取り組みをどう進めるか、皆さんと考えたいと思いました。



〔ワールドカフェ方式で
参加者が書き出した意見〕

分科会⑧ 「ジオストーリー・専門員」

「なぜだろう?」からジオストーリーへ

参加者：樋口尚樹

「三陸」「佐渡」「豊後大野」の 3 つのジオパークを事例に、「地形・地質」「生物・生態系」「歴史・文化」の視点から、グループに分かれてストーリーを作りました。「生物・生態系」「歴史・文化」の観点からのストーリー作りも、その地域の生態系や歴史文化をはぐくんだ大地の成り立ち、ひいては地球の変動とも関連づけなければジオストーリーにはなりません。今回の分科会のように、自分が知らない他地域のジオストーリーを作るのは、あくまでも机上の模擬ストーリーに過ぎません。真のジオストーリーは、その地域を熟知している住民が作るものです。あなたが住む地域の「なぜだろう?」から出発して、ストーリーを展開していく醍醐味。あなたも、ジオストーリー作りに挑戦してみませんか。



〔多様な考えが出された分科会〕

エクスカーション（ジオツアー）に参加して

秋田県には4つのジオパークがあります。大会最終日となる10月27日（金）のエクスカーションでは、男鹿半島・大潟と県内ジオパークを多くの参加者に体験してもらうために、9つものコースが設定されました。萩からは5つのコースに参加しました。そのいくつかを紹介します。

エクスカーション3 「Let's 冒険ボルケーノ」

参加者：斉藤みよ子

火山によってつくられた地形、二ノ目瀉は、阿武火山群と同じ単成火山です。でも、水が多いところにマグマが噴き出し、水蒸気爆発が起こってできた火口の湖です。地殻の下でしか見られないカンラン岩が、火山活動により地上に持ち上げられたという標本も見せてもらいました。寒風山回転展望台からの景色も素晴らしいものでした。地元のジオガイドさんによるツアーは楽しく、親切でわかりやすい説明でした。副産物として、研修会などで知り合った各地のガイドさんたちと再会し、友好を深めたことや、新たに友達が増えたことも、私にとっては一番のお土産になりました。



〔地元のガイドさんと一緒に〕

エクスカーション7 「秘境の大地はあったかい？」

参加者：伊藤靖子

私は、山形県、宮城県、岩手県との県境の「ゆぎわジオパーク」のツアーに参加しました。このジオパークのキャッチフレーズは、「いにしへの火山の恵み あつき雪 活かして築く歴史と暮らし」です。活火山はないものの、今も地下深くにあるマグマの熱によって、温泉が沸き、地熱利用が盛んな場所です。ジオガイドさんによるツアーで「見えない火山」を満喫しました。特に心に残ったのは「子安峽大噴湯」。恐竜の時代に堆積した泥と砂が岩となり、川の流れが60mほど削った溪谷。川底まで階段で下り、河岸を歩くと断崖から噴き出す温泉。今も生きる地球を体感できる場所でした。



〔間近で噴き出す温泉〕

エクスカーション9 「SAKE（鮭・酒）で感じる鳥海山！」

参加者：樋口尚樹

秋に日本海から川を遡上してくる鮭、そして室町時代から続く日本酒醸造。この地域では、古くから鮭漁と酒造が盛んです。その理由は、活火山鳥海山から生み出される清冽な湧水があるからです。山麓には九十九島で有名な象瀉があります。ここは、松尾芭蕉の「奥の細道」でよく知られています。九十九島は、約2500年前に鳥海山が噴火して山体崩壊と岩なだれによって出来ました。長い間入り江に浮かぶ島々でしたが、1804年の地震によって隆起し、現在のような地形となりました。芭蕉は、鳥海山の溶岩が流れ下ったゴツゴツの塊状溶岩の上を歩いて象瀉にやってきました。そこは、馬での通行が不可能な難所でした。測量で全国を歩いた伊能忠敬も、この溶岩の難路には辟易しています。また、東北遊歴をした吉田松陰も、石の道が大変険しかったと日記に書いています。



〔吉田松陰も歩いた溶岩の道〕

今回のジオツアーは食のみならず、歴史をテーマに加えても面白いと感じました。